

九谷焼上絵付の絵具に於ける色彩の嗜好性について

嵐 一 夫

九谷焼に於ける上絵付の絵具は、大体共通しているが、生産コストの低減を計つたり、新材料の発見と着色剤（呈色剤）の混合によつて、商品価値の向上をはかる目的のため、色々の絵具が陶画家や研究者によつて商品化されている。しかし九谷独自の一品製作的要素が強く、各自秘法にしている。このことが量産の面で進歩が遅れている原因の一つである。商品の販路を拡充し、生産を適確にするためには、個人にはおのおの異つた色彩の嗜好や地域による色彩の心理的反応も又無視することはできない。

以下関連する実験ならびに、その結果について、私の試作品（エジプト模様湯呑）の湯呑について、昭和31年～40年（1956年～1965年）の10年間の動向をまとめたものである。



湯呑（エジプト模様）

(1) 一年間に販売された湯呑（アイボリー陶器+黒い陶器）の色の嗜好

年度 色	31年	32	33	34	35	36	37	38	39	40
緑(青)	個数ヶ 896	204	595	730	800	605	570	555	488	475
紺	372	37	197	104	95	121	36	47	61	55
黄	204	30	112	27	45	63	19	10	25	15
紫	130	19	56	31	38	18	5	7	11	16
赤	163	20	101	41	45	29	15	19	26	19

(1) 表は一年間に販売された湯呑の数を色彩別にするにより、色による嗜好と需要の関係を示す。

・グリーン系の湯呑は赤・紫・黄系の10倍以上の需要がある。

〔註〕 九谷焼の青は緑のことである。

(1) 表をさらに、素地別にわけたものが(2)表である。

(2) 一年間に販売された湯呑の個数

年度 素地	31年	32	33	34	35	36	37	38	39	40
アイボリー	個数 ケ 1060	215	846	655	841	642	594	589	513	493
黒い	605	95	215	278	181	194	51	49	98	87
計	1665	310	1061	933	1033	836	645	638	611	580

素地としては、”つちもの”を使う。大別すると次のようにわけることができる。

アイボリー陶器

素地	粘 土		釉 薬	
	信 楽	花 坂	長 石	土 灰
	2	1	80%	20%

〔註〕 酸化で焼いたもの。

黒い陶器

素地	粘 土		釉 薬	
	若 杉	花 坂	長 石	土 灰
	80%	20%	80%	20%

〔註〕 還元で焼いたもの。

(3) 表, (4) 表は(1)表をアイボリー陶器, 黒い陶器別に分け, 素地に付けた和絵具の色と, 需要の関係を示す。

アイボリー陶器に和絵具を付けた場合の色の嗜好

(3)

年度 色	31年	32	33	34	35	36	37	38	39	40	計
緑	個数 ケ 603	143	485	514	677	482	532	513	423	419	4791
紺	221	25	150	71	71	87	31	43	49	42	790
黄	143	21	83	21	33	41	16	8	17	9	392
紫	86	13	45	19	29	14	4	7	8	11	236
赤	107	13	83	30	32	18	11	18	16	12	340
計	1160	215	846	655	842	642	594	589	513	493	6549

黒い陶器に和絵具を付けた場合の色の嗜好

(4)

年度 色	31年	32	33	34	35	36	37	38	39	40	計
緑	個数ヶ 293	61	110	216	123	123	38	42	65	56	1127
紺	151	12	47	33	24	34	5	4	12	13	335
黄	61	9	29	6	12	22	3	2	8	6	158
紫	44	6	11	12	9	4	1	0	3	5	95
赤	56	7	18	11	13	11	4	1	10	7	138
計	605	95	215	278	181	194	51	49	98	87	1853

アイボリー陶器と黒い陶器を販売された湯呑の数でくらべた場合、アイボリー陶器は黒い陶器の約5倍の需要があることがわかる。このように、アイボリー陶器の需要が多いのは、食器としての清潔感、色としての安心感、信頼感があることによると思われる。

下記の(5)(6)(7)(8)(9)表は、OstwaldのColor harmony manualの色環の中より同系統の色相のものを3つづつえらび出し、その色相の絵具(九谷絵具・和絵具)をつくり、エジプト模様湯呑(写真)につけ、それぞれ同じ個数を関東(東京)、関西(大阪)、北陸(金沢)で販売した結果である。

- [註]
- ・色相・明度・彩度によりそれぞれ地域の嗜好、趣向は違う。ここでは色相だけの結果である。
 - ・販売場所は、専門店、デパートである。
 - ・昭和31年～40年(1956年～1965年)の10年間に販売された個数。
 - ・OstwaldのColor harmony manualをつかつた理由は、色表が、九谷焼和絵具のガラス性の感じに近いものであるから。

(5)

色 彩 (color)	アイボリー陶器			黒い陶器			
	北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)	北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)	
緑 (青)	hue 20 pa Vivid Turquoise Green	個数 1121ヶ	337	146	249	32	95
	hue 21 pa Vivid Emerald Green Vivid Green	242	390	951	67	103	200
	hue 22 pa Brite Kelly Green Vivid Green	198	924	482	63	193	93

青(緑)については、関東(東京)は黄系に近い明るいGreenが好まれ、北陸(金沢)では、青系に近いシブイGreenが好まれる。関西(大阪)はその中間で、Greenの色相の幅にあまり差がない。

(6)

	色 彩 (color)	アイボリー陶器			黒い陶器		
		北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)	北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)
紺	hue 15 pa Vivid Cerulean Blue Vivid Blue	個数 181ヶ	32	45	89	12	18
	hue 14 pa Vivid Blue	63	72	132	21	28	47
	hue 13 pa Royal Blue Ultramarine	37	155	73	17	67	36

紺については、関東(東京)は赤系に近い彩度の高いものが好まれ、関西(大阪)はやや彩度のおとしたもの、北陸(金沢)では Green 系に近い紺が好まれる。

(7)

	色 彩 (color)	アイボリー陶器			黒い陶器		
		北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)	北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)
黄	hue 3 pa Brite Marigold Brite Yellow Sunflower	個数 93ヶ	21	28	35	6	11
	hue 2 pa Brite Yellow Buttercup	21	42	65	12	15	26
	hue 1 pa Brite Yellow	18	73	31	16	23	14

黄色は関東(東京)は、Green に近い黄が好まれ、北陸(金沢)では赤系に近い黄が好まれる。関西(大阪)は hue 2 pa より hue 1 $\frac{1}{2}$ na の明るい色調が好まれる。

(8)

	色 彩 (color)	アイボリー陶器			黒い陶器		
		北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)	北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)
紫	hue 12 pa Violet	個数 32ヶ	25	21	13	10	6
	hue 11 pa Purple	11	22	49	8	11	16
	hue 10 pa Fuchsia Purple	8	50	18	5	18	8

紫色は関東(東京)では赤紫、北陸(金沢)では青紫、関西(大阪)は、赤紫系の明度の高いものに嗜好が強い。

(9)

色 彩 (color)	アイボリー陶器			黒い陶器		
	北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)	北 陸 (金沢)	関 東 (東京)	関 西 (大阪)
hue 6½ pa Poppy Red Tomato Red	個数 71ヶ	14	21	22	10	16
hue 7 pa Brite Cherry Red Brite Red Scarlet	31	38	49	11	15	22
hue 7½ pa Brite Red Cardinal	18	63	35	7	23	12

赤色は、関東(東京)では彩度の高いセレン系の赤が好まれ、北陸(金沢)では、カーマイン系の赤に嗜好が高い。関西(大阪)は明るいセレン赤が好まれる。

(10)(11)(12)(13)(14) 表は (5)(6)(7)(8)(9) 表の色相を上絵付絵具(九谷絵具)で出す場合の実験調合表である。

(10) 青(緑)

色 絵具	唐の土	硅石	白玉	酸化銅	酸化鉄	クローム酸鉛	酸化コバルト	重クローム酸カリ
hue 20 pa	65	20	15	5.5	0.05		0.15	
hue 21 pa	65	20	15	5.5			0.1	
hue 22 pa	65	20	15	5.5		0.05		0.02

[註] 関東向商品の場合、重クローム酸を少量青緑の和絵具の中へ入れるとよい。

青(緑)をつくる呈色剤としての酸化銅は、黒色酸化銅と赤色酸化銅とがある。黒色の方は酸化第二銅(CuO)赤色の方を酸化第一銅(Cu₂O)という。普通黒色の方を使用するとよい。

(11) 紺

色 絵具	唐の土	硅石	白玉	酸化銅	クローム酸鉛	酸化コバルト	二酸化マンガン
hue 15 pa	65	20	15	1.0	0.1	2.0	
hue 14 pa	65	20	15	0.5	0.1	2.0	
hue 13 pa	65	20	15			2.0	0.05

[註] 関東で好まれる赤系の紺は酸化マンガンを少量加えることによりできる。

着色剤としての酸化コバルトは、市販品に2種あり、灰色のものはCo₃O₄、黒色のものはCo₂O₃に相当すると云われる。国内に産出少なく殆んど輸入品によつて見るとよい。灰色のものは金属コバルト72%、黒色のものは68%で、これ以下のものもある。灰色のものは、酸化アルミナを混じて、高温(1,300°C)に焼いて、海碧の彩料に適している。

(12) 黄

色 \ 絵具	唐の土	珪石	白玉	酸化鉄	クローム酸鉛	重クローム酸カリ
hue 3 pa	65	20	15	3	0.2	0.1
hue 2 pa	65	20	15	2	0.2	0.05
hue 1 pa	65	20	15	1	0.1	0.01

〔註〕 関東で好まれる、hue 1 pa の黄色は、重クローム酸を入れるより、クローム酸鉛の方を多く入れなければならない。

着色剤（呈色剤）としての酸化鉄は、紅柄又は、第二酸化鉄 (Fe_2O_3) をつかう。通常硫酸鉄を煨焼して水簸・乾燥して製す。低温程きれいなものができる。

(13) 紫

色 \ 絵具	唐の土	珪石	白玉	二酸化マンガン	酸化コバルト	酸化銅
hue 12 pa	67	18	15	1.0	0.05	0.05
hue 11 pa	67	18	15	1.2	0.05	
hue 10 pa	67	18	15	1.3	0.1	

〔註〕 紫の和絵具（九谷絵具）をつくる場合、酸化マンガンを入れるが、マンガンは融点が高いので媒容質（硝子質）の珪石を少なくする。

着色剤（呈色剤）としての酸化マンガンは、通常使用するのは、二酸化マンガン (MnO_2) で、天然の軟マンガン鉱がそのまま使用されるが、不純物がある。最近のマンガン鉱には、二酸化マンガン70%以上のものが少い。石川県能登産のマンガン鉱は、能登呉須と云つて青九谷の骨描き用に使用されている。

(14) 赤

色 \ 絵具	唐の土	珪石	白玉	エン化金	ツヤピンク	円子
hue 6½ pa	65	20	15		10.0	
hue 7 pa	65	20	15		8.0	2.0
hue 7½ pa	65	20	15	1.0	9.0	1.0

〔註〕 赤系の和絵具（九谷絵具）は今まで九谷焼にはなかつたもので、つくるのに苦心しました。媒容質（硝子質）の中へ、洋絵具のエン化金、ツヤピンク、円子等を呈色剤（着色剤）として入れる。